

日本フランス語フランス文学会

cahier

26

septembre 2020

I 書評

- 大野英士『オカルティズム——非理性のヨーロッパ』
小倉康寛 1
- 宮川朗子・安川孝・市川裕史『フランス大衆小説研究の現在』
辻川慶子 3
- フィリップ・アモン『イマジュリー 19世紀における文学とイメージ』
中村 翠 5
- 小倉康寛『ボードレールの自己演出——『悪の花』における女と彫刻と自意識』
廣田大地 8

II échos (会員投稿欄)

- ジゼル・セジャンジェール教授 連続講演会
中島太郎 10

I 書評

大野英士（著）『オカルティズム——非理性のヨーロッパ』、講談社選書メチエ、2018年

評者：小倉康寛（岐阜大学（兼））

ルポルタージュのような文体を持つ本書は一見、軽妙な読み物とさえ錯覚するのだが、思わぬところから、読者を近現代に対する批判へと誘うだろう。タイトルの通り、本書は随所でオカルトの入門書の役割を果たす。しかし神秘主義の解説をするばかりではない。本書はミシェル・フーコーの「エピステーメ」や、フランス近代の構造を分析したフィリップ・ミュレーの理論を導入する。また本書が「オカルト」と呼ぶものは、魔術だけではなく、著者が独自に「オカルト化」と呼ぶ現象が含まれている。本書の目論見は、次のように広がっているようである——。従来では結びつきがむずかしかったものを、「オカルト」という切り口で類比し、近代を眺望すること。さらにヨーロッパと照らして、現代日本の将来を占うこと。以下では「オカルト」を2つに分けてみる。

第1のオカルトは、アントワヌ・フェーヴルのエジテリズム学の延長に位置する学知、いわゆる「魔術」である。魔術をめぐる転換は17世紀に起きた（序章）。魔術は恐怖の対象ではなくなり、その裁き手も教会から、国家官僚へと変わった。本書はここを定礎にしつつも、魔術の要点を振り返る（第2章）。そもそも魔術は類比の論理を基盤としていた。魔術師たちは万物の照応を信じ、天体の運行と地上の出来事など、あらゆるものの間に、アナロジーを見出した。こうした魔術は中世に迫害され、ルネサンス期に新プラトン主義者らの手で理論化された。そして近代でも命脈を保ち、スウェーデンボルグ（第3章）や、エリファス・レヴィ（第5章）が、その継承者となる。またメスマーの動物磁気（第7章）が流行する。心霊術やブラヴァツキー夫人の神智学（第8章）は広範に支持された。しかし現代への流れで、オカルトの諸派は多角的に批判される。特に古くから信じられていた精神流体は、科学で裏付けが取れない。神秘は催眠術の範疇で理解される。以上のオカルト史は、本書の時間軸を担っている。

第2のオカルトは、1986年に上梓されたフィリップ・ミュレー著『時代を超える19世紀』の中に示された「19世紀性」に則して提起される（第4章）。18世紀末の大革命より始まった近代フランスは、理性をこそ重要視した。19世紀にはオメーによるブルジョワ的な科学主義が力を増していく。だがミュレーによると、19世紀人たちは喪失感を抱え、心の穴を埋めようとしていた。本書はこの紹介と

して、まず、オーギュスト・コントとシャルル・フーリエといった左派思想家のオカルト化を取り上げる。彼らは王や神を排除し、理性を特権化したが、何かを崇拜したい欲求を捨てきれなかった。この見方によれば、パンテオンは、祀る対象をイエスや国王から、偉人の死体へと変更したに過ぎない。つまり彼らの理性は、崇拜の対象を必要とする点で、曇りが見られるという。

さらに20世紀初頭、左派の一派がカトリックの側に身を転じた（第9章）。この流れに1886年に起きたポール・クロードルの改宗が入ってくる。そして心霊術は科学と融合し、「心霊科学」という新たな鋳物で焼き直しされる。本書によれば、それはブルジョワ文化へ抵抗した左派知識人たちの精神を支えた。

ミュレーが左派のオカルト化を論じたとすれば、著者が取り組んできたのは、右派のオカルト化である。19世紀初頭、ジョゼフ・ド・メーストルら保守の思想家は、神が王殺しに怒っていると考え（第6章）。その流れで、従来の信仰を手ぬるいと批判し、神への許しを乞うための過激な主張が起きてくる。著者は19世紀後半の、パリのサクレ・クール寺院の建立をこの一例と理解する。また独自の聖母信仰が生まれ、著者が「マリア異端派」としてまとめる一群が形成されていく。著者の専門のユイスマンスは、ここに位置付けられる。

しかし他方で20世紀初頭には、どちらの動きにも乗れなかった大衆がいた。ナチスは大衆の不安をオカルトに回収することで跋扈した（第10章）。

著者は、以上の「非理性のヨーロッパ」史と照らし、現代日本を考える。ニューエイジの祖がエリファス・レヴィであるなら、オウム真理教の源も同様ではないか（第1章）。またアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を称賛した終章で、著者は問いかける。「ゴシック・アンド・ロリータ」のファッションに身を包む女の子や、思春期を引きずる「中二病」者らこそが、「『来るべき蜂起』を企む邪眼を帯びたテロリストかもしれないのだ」。かつて左派オカルティストはブルジョワ社会に対峙した。同様にサブカルチャーの担い手が、ネオリベリズム社会と対決することを著者は、期待しているという。

魔術、そして左派、右派、全体主義、現代日本のオカルト化など、俎上にあがる対象は目まぐるしく変わっていく。その度に、本書の「オカルト」という言葉のニュアンスも変わっていく。例えばパンテオンや聖心信仰を「オカルト」と呼び変えた時、著者は「文化」や「信仰」に距離を置いたと読める。他方でナチスを「オカルト」としたことは、糾弾と読める。著者は断層のある「オカルト」を併置し、その間に、アナロジーを自在に見出していく。魔術の基盤である類比を、著者自身が自らの論理として採用したとも言える。しかし中世スコラ学のカイエタヌスから論理学で指摘されてきたように、類比は、比較する対象の性質を揃え、混淆による誤謬を避けなければならないはずだった。著者はリスクを承知で、提起を試みたのではないかと――。文化は一般に「善い」とされている。しかしナチスにつながる因子は、どこにでも潜んでいるのではないかと。軽快な文体に反して、本書は、近現代に対する仮借ない懐疑に貫かれている。

評者：辻川慶子（白百合女子大学）

「大衆小説」は文学の周縁に位置するのだろうか？ リーズ・ケフェレックはこの考えを否定し、大衆小説こそがあらゆる人々の読書の中心にあったと指摘した。今なお読み継がれるデュマやヴェルヌ以外にも、19世紀のポール・ド・コック、ウジェーヌ・シュエ、ポンソン・デュ・テラーユらは、正統な文学としては認定されずとも、読者の熱狂をかき立て、時に社会への強大な影響力が恐れられもした。19～20世紀に刊行されたフィクションの90%を占めるともいわれる「大衆小説」の歴史に関しては、2014年に刊行されたダニエル・コンペールの『大衆小説』（宮川朗子訳、国文社）が詳しい。さらに、宮川朗子が安川孝、市川裕史とともに刊行した『フランス大衆小説研究の現在』は、大衆小説を研究する最前線の立場から、大衆小説研究がはらむ問題点に切り込み、研究の今日的展望を提示している。

本書は大きく三つの部分に分かれる。まず安川孝による「フランス大衆小説研究動向」という貴重な研究レビューがあり、次に著者三者による「犠牲者小説」、ゾラ『マルセイユの秘密』、ウドリーヌとデバントを対象とした個別研究、さらに巻末には「大衆小説研究のための参考文献」および「大衆小説年表」と索引がある。この文献一覧と年表は、文学研究のみならず、教育制度や出版・メディア史などの文化史的観点からも必見の資料である。

安川孝による「フランス大衆小説研究動向」では、主に1990年代以降の大衆小説研究の明確な見取り図が示される。第一に大衆小説の「読者」をめぐる問題系がある。1833年のギゾー法、1881-1882年のフェリー法などの初等教育制度は読者層を大きく拡大したが、歴史家の実証研究が示すように、大衆小説は「民衆」に限定されない広い読者層を対象としていた。そうした読者は、「大衆のアヘン」とも呼ばれる小説にただ操作され、画一的に教化されるような受動的な存在だけではなく、作品で語られることを「領有」し、自らの運命の意味を発見する創造性をもつ存在でもある（リヨン＝カーン）。本書の論考でも、安川の「犠牲者小説」論は、読者がいかに作品の顕在化に参加しているかを示し、さらに宮川朗子のゾラ論は、三面記事と連載小説という現実と虚構の狭間で、読者が新聞とインタラクティブな関係を築いていたことを指摘する。

第二に大衆小説に固有な語りやテキストの問題、つまり大衆小説と文学的小説とを区別する基準の問題がある。ダニエル・クエニャの『二次文学入門』以降、

大衆小説固有の特徴として、表紙や叢書などパラテキストの重要性、既存の小説などで読者に馴染みのある類型の再利用、物語における「好奇心」や「サスペンス」の効果（パロニ）などが指摘されてきた。しかし、これは大衆小説が文学的小説と質的に異なることを意味するのだろうか。コンペールは二者の文学の区別は「文学的価値の認定機関」によるもので、「テキストの内的な基準は存在しない」と考える。安川は「犠牲者小説」の精緻な分析を通してこの論に修正を迫り、物語の「緊迫感」や典型的なもの、読者の物語への没入、パテティックな効果が生み出す同情や憤激などを分析し、大衆小説固有の特徴を抽出する。

第三に、メディア文化という観点から、媒体が作品を規定するという「媒体の詩学」（テランティー）、出版社の販売戦略や流通網などに関する「テキストの社会学」（マッケンジー）などの研究がある。モリエが示すように、発表媒体はしばしば作家や作品のステータスにも影響を及ぼすほどで（例えば、ピエール・ロチは廉価本コレクションで作品を刊行したために通俗的作家とみなされる）、媒体の持つ象徴的機能についてはさらなる研究が待たれる。加えて、大衆小説の戯曲・映画化、テレビ・ドラマ化や、様々な印刷媒体（配本形式、新聞小説、完全版、縮小加工版）におけるテキスト加工など、現代のメディアミックスにも繋がるライトやアダプテーションの問題も興味深い。

これらの観点から、宮川はゾラの『マルセイユの秘密』を取り上げ、大衆小説的手法（新聞の広告というメディア的操作、既存小説や実在の事件への参照）がこの初期小説に見られることを確認する。そして裁判記録など膨大な資料を駆使するゾラの創作方法や歴史記述の真正さが『マルセイユの秘密』にすでに見られること、とはいえ再版時には、自然主義文学擁護という出版社や作者の地位に鑑み、連載版に削除が加えられていることなど、大衆性と文学的価値との間の揺らぎを明快に論じている。市川裕史による「大衆小説とパンクロック・カルチャー」では、パトリック・ウドリーヌとヴィルジニー・デバントの接点を通して、大衆小説と共通する要素（パルノ、推理小説、ユークロニー（歴史改変小説）的要素）やモチーフ、登場人物像が分析され、小説・映画・音楽・BD・ロック評論など複数の媒体を自在に往来する二人の小説家のパンク概念の差異が、ルーザーという現代の主人公などを通して論じられている。

今日、文学社会学や文化史、文芸事象の歴史学などが隆盛を見る中、大衆小説や文学外の著述までも含めた広大なコーパスの中で文学作品を捉え直すという大きな動きが見られる。「文学」の境界自体を問い直し、読者や媒体の問題、文学的価値の認定機関、社会における作家の地位などの問題を、さらに広大な領域の中で検討するためにも、本書は貴重な視座を与えてくれる。

フィリップ・アモン（著）『イマジュリー 19世紀における文学とイメージ』、
中井敦子・福田美雪・野村正人・吉田典子訳、水声社、2019年

評者：中村 翠（京都市立芸術大学）

本書はフィリップ・アモンによる、19世紀における視覚イメージが文学にもたらしたパラダイムシフトを追究する論文集である。2001年に全8章にて初版が上梓され、2007年には第9章から第12章が追加された上、前書きと結論が多少加筆されて改訂版が出版された。

19世紀はイメージの横溢する世界となったが、それによって視線のあり方は変化した。アルバムをぱらぱらとめくる視線、挿絵本や広告や絵入り新聞の上をジグザグと走査する視線、走る汽車の内側から窓枠を通して外を見る視線、その逆に、走る汽車の内側を外から見る視線など。このような新しい視覚の行為は、文学における描写のあり方を、また文学そのものを読むときの視覚のあり方をも変えてしまう。数多の作品を一堂に集めるミュージアムは、脱文脈化した事物の隣接的・羅列的描写によってテキスト内に体现される。街路のポスターは、スローガンのような簡潔なテキストの切り貼りによって模倣される。イメージが文学をどう変容させたか、またその逆に文学がイメージをどのように見せたか、というターニングポイントを捉えた点で、刺激的な書である。ここでは網羅的に紹介することは控えるが、これら当時のイメージ装置と文学の相互干渉が、それぞれの章で取り扱われている。

しかし、12章はそれぞれ完全に独立したトピックというよりは、同じ話題がいくつかの章を縫って呼応することもある。たとえば、写真を論じる第1章でも登場したアルバムは、第10章で新しい読書のあり方（ぱらぱら読み）のモデルとして重点的に語られる。おなじく第1章の写真の暗箱は、像を焼き付けるものであるが、身体にまつわるイメージを論じる第5章では、最初の男の影響を永続的に受けるという「感応遺伝」を刻印される女性の身体の比喩として、ふたたび触れられる。一方、女性の身体については第3章においても、アトリエと身体の断片化、とりわけ女性の腹部との共謀関係が論じられている。あるいは、都市の中のイメージを扱う第4章では、ランボーやラフォオルグの詩の並列的「コラージュ」技法が、まさにその詩が言及するポスターの表現方法を、そのまま詩の文体にひきうつしたと指摘しているが、これは第9章における、イメージを語る言葉そのものがイメージを模倣するという分析の先駆けとなっている（イメージを追う視線のジグザグ＝詩の韻律・構文・物語を追う視線のジグザグ）。また第4章で論じられた街路は、第7章のテーマである扉絵においても、しばしば室内の隠者

が窓から眼下に観察する対象として描き込まれている。すなわち、複数のテーマが論じられながら、読み進むうちにそれぞれが関連し合うことで全体像が把握されていくのである。

このようなアモンの書が、精緻な翻訳で日本に紹介される運びとになったことには、翻訳者の四方の功績を讃えたい。巻末の詳しい訳注と、文中のカッコ書きによる簡潔な訳注との使い分けによって、頻繁に読書が中断されることなく（それこそ過度の視線の徘徊を回避して）読める工夫がなされている。とりわけ第4章、第11章の訳注は、アモン自身の細かい間違いを指摘し正しい情報に修正しており、あらゆるレフェランズを確認したことがうかがえる、目の行き届いたものとなっている。

ただし、指摘したい箇所が一つある。第5章 p. 160、エミール・ゾラの『マドレーヌ・フェラ』（1868）について論じている箇所である。訳文では、「そして小説は宿屋の一室で結末を迎える」とあるが、その部分の原文引用は「*Et le roman se dénoue dans une chambre d'auberge [...]*」（原著, p. 219）である。*se dénouer* という動詞がここでは「結末を迎える」と訳されているが、もとは「錯綜していたむすび目がほどける」という意味であり、それが必ずしも物語の結末部にあたるとは限らない。現に『マドレーヌ・フェラ』では、第9章末尾から第10章にかけて、ヒロインは避けてきたかつての恋人と宿屋の一室でついに再会してしまうが、悲劇の結末は第13章、宿屋ではなく自宅に戻ってからである（*Madeleine Féral dans Œuvres complètes*, Nouveau Monde, t.3. 余談ではあるが、ここでも不吉な13という数字を悲劇の結末の章立てに設定するゾラのこだわりが見られる）。当然 *dénouement* は物語の後半部に位置するわけであるが、「結末」という日本語から受け取る幕引きといったニュアンスとは少し異なるため、*se dénouer* の訳は常に悩ましいところである。

ところで、このたび日本語訳が出版され、いま改めてこの書を目にする私たちが何を考えるのか、ということにも触れなければならない。

2001年、そして2007年に原著が刊行された頃の読者は、おそらく映画、テレビ、またはすっかり普及し多くの人が持つようになったパソコン、そしてインターネット上に氾濫するイメージについて思いを馳せたことだろう。

一方今日の社会については、スマートフォンを思い浮かべずにはいられない。2001年には当然まだ存在せず、2007年ですら、Apple から iPhone が出たとはいえまだ巷には普及はしていなかったスマートフォンは、フランス語原著刊行時とは決定的に異なるあり方を視覚イメージに与えただろう。

19世紀ではジグザグの読み方が、読書を変えた。目がページの上をなぞる動線が変わった。そしてパソコン以上にスマートフォンやタブレットが普及した現在では、上下方向あるいは左右方向にスワイプされ、消えていくイメージを捉える動線となっている。このようなイメージへの視線は、テキストにも影響を与え

ずにはおかない。Twitter (2006～) は、携帯の小さな画面で一目で把握できる140文字という字数制限ゆえに、スローガン・警句的テキストとの親和性が高く、政治的な場面に合致しやすい。このことは、本書の街路・広告の章を想起させる。上下方向のスクロールで羅列状に可視化されるハッシュタグによるデモもその一例である。あるいは、そのリアルタイム性と拡散力によって、Twitter の短いテキストを伴った画像や動画がジャーナリズムをも変容させつつある。Instagram (2010～) は、写真というイメージの列挙によって自分史をいかに対外的に構築していくか、という意味において、個人のフィクション生成装置となっている。その際、アルバムのばらばら読みは Instagram においてはスワイプという行為にとって代わられる。

このような新しい視覚の行為は、どこまで深く文学の変容に根付いていくのか。それを見届けるのはもう少し後のことになるとしても、21世紀初頭に19世紀を振り返った原著が、少しのタイムラグを経て日本語訳で出版されたことで、現在進行形の21世紀をいったん振り返らせ、我々の生きる時代を相対化して見せるのである。

小倉康寛（著）『ボードレールの自己演出——『悪の花』における女と彫刻と自己意識』、みすず書房、2019年

評者：廣田大地（神戸大学）

本書は、小倉康寛氏が自身の博士論文（一橋大学、2017年提出）を大幅に書き改めたうえで出版した500ページを超える大著である。本書の副題からもその片鱗が窺える「愛する女の彫刻化」という独自の視点から、生成研究の論点も押さえつつ『悪の花』の再解釈が試みられる。ボードレールに関する翻訳書やエッセーは近年も頻繁に出版されているが、単著の研究書が刊行されるのは、2006年の岩切正一郎氏による『さなぎとイマーゴ』以来ではなかろうか。専門を同じくする研究者にとっては、近年の研究動向を把握するうえでも非常に有益な著作であり、特にこれからボードレール研究に着手しようという若手研究者にとっては必読の一冊と言えよう。もちろん一般の読者にも読みやすいような文体や構成が配慮されており、本書はボードレールの詩学についての優れた入門書ともなっている。

全体像を確認しておくと、本書は「自己演出と芸術」（全3章）、「彫刻と想像力」（全4章）、「『悪の花』読解」（全5章）の全3部（全12章）で構成されている。「小帰結」が付された各章はそれ自体でも独立した論文として読むことができるため、読者は自身の関心に最も近そうな章から読み始めることもできる。ただし本書はけっして雑多な論文の寄せ集めなどではなく、3部構成の各部が異なる切り口、異なる語り口からボードレールを論じることで、その積み重ねにより最終的に奥行きのある立体的な詩人像を構築しており、その点にこそ本書の最大の魅力があるだろう。

まず第1部は、あたかも推理小説の探偵を思わせるような理知的な語り口となっている。これには小倉氏が最近研究に着手しているエドガー・ポーの影響があるのかもしれない。豊富な資料を元に、無駄を省いた簡潔な文による推論を積み重ねて、小倉氏はこれまでのボードレール研究において指摘されることのなかった幾つかの結論にたどり着いている。この点については後述したい。

つづく第2部の語り口は、歴史家のものである。著者は詩と彫刻の両分野を行き来しつつ、古代から19世紀までの西洋美学の変遷を丁寧に辿って見せる。小倉氏はこれまで18世紀の美術史家ヴィンケルマンとボードレールの関わりについて論じてきたことが知られているが、この第2部においてはそのような個別の論証が組み合わさり、一つの流れとして結実していることを読者は目撃するだろう。また、ボードレールが彫刻を「退屈」と評した理由について、19世紀なかば

の時代背景をもとに詳しく検証している点も興味深い。

最後の第3部の語り口は、ここまでの二つの語り口と比べるとそれほど目新しいものではない。小倉氏は、自らが先行研究として挙げているモソップ、ベルサーニ、リヒターといった先人の語り口を踏襲しているかのようだ。ただし彼らのように詩集から一つの物語を紡ぎ出そうとすることには限界がある。小倉氏は、『悪の花』初版の詩篇の配列には「百一の階乗通り」の可能性があったとしたうえで、ボードレールが最終的に選択した配列に込められた意図を推測するという客観的な立場をとっている。先行研究と小倉氏の手法を分かち合う一つの点として、全3部による本書の構成という利点がある。第1部・第2部で行ってきた綿密な議論を背景とし、その議論の結果を第3部において絶えず援用することで、詩人の実人生や歴史的背景との関連性に基づいて『悪の花』の各詩篇やその配列の意義を読み解くことが可能となっているのである。この点において、本書は3つの異なる領域の研究を足し合わせたものではなく、最終的に「詩集の全体性」の理解という一つの目的に向かって、周到に計算して再配置されたものであることに読者は気付かされる。その事実は詩集『悪の花』の成立とも重ね合わせ、小倉氏のボードレールに対する深い情熱と敬意を窺い知ることができるだろう。

ちなみに、評者が個人的にもっとも関心を抱いたのは、小倉氏が最後に執筆したという第1部「自己演出と芸術」である。第1章の「『悪の花』の演出」では、『悪の花』は自伝的な作品でも完全な虚構でもなく、作者が自伝的な内容をもとにして自己演出した作品として読むべきであるという主張が展開される。そのなかで小倉氏は、詩集の発表以前の若かりしボードレールが記した作品や書簡などを紐解くだけでなく、詩人とともに「ノルマンディー派」という詩人グループを形成していたル・ヴァ・ヴァスールなど、これまであまり注目されてこなかった周辺人物による一次文献を多数紹介している点が注目に値する。そのような資料から導き出されるのは、ボードレールがドゥゾワ夫婦の店舗にて日本製の書見台を購入していたという仮説や、執筆時期の異なる原稿をハサミと糊を用いて実際に貼り合わせて推敲していたという仮説であり、読者は詩人の実人生を垣間見ているかのような胸の高鳴りを感じることだろう。また、第2章はこれだけで独立させて読んでも一級のボードレールの「ダンディー論」入門となっている。おそらく第1章・第2章を読み進めてみれば、読者の多くは本書の魅力的な語り口と議論とに引き込まれ、全12章を飽きることなく読み通してしまうことだろう。

以上のとおり、本書は著者である小倉康寛氏の幅広い関心と資料収集の結果に基づく本格的なボードレール研究書であり、今後の小倉氏のさらなる活躍をおおいに期待させる一冊となっている⁽¹⁾。

(1) 本書評は、2020年4月26日に cahier 電子版に掲載されたものの再録です。

II échos (会員投稿欄)

ジゼル・セジャンジェール教授 連続講演会 (2019年3月～4月)

中島太郎 (中京大学)

2019年春にパリ東大学 (現 Gustave Eiffel 大学) のジゼル・セジャンジェール氏が来日し、東京と名古屋でそれぞれ講演会を行った。

第一回講演会は、2019年3月28日立教大学 (司会：菅谷憲興氏) で行われた。題目は「歴史の思想における人種：フローベール、オーギュスタン・ティエリ、ミシュレ」である。

はじめに18世紀までの人種概念を見渡した後で、19世紀においていかに人種が一つの問題として浮上したのか説明がなされた。聖書の人類単一起源説に対して、18世紀には多元発生説が唱えられた。またリンネのような生物不変説に対して、18世紀末に最初の進化論が現れた。人間と動物が一つの系統であるという考えは、たとえばレチフ・ド・ラ・ブルトンヌにもみられる。こうした大胆な文学的想像力は、ラマルクら19世紀初頭の進化理論に先立つものである。若きフローベールも、『汝何を望まんとも』(1837)において、人間とサルの中間的存在を描いている。ただし、そこでは白色人種の優位性を描くことはせず、16世紀のモンテーニュと同様、飼い主である白人の残忍さと猿人の暴力を同時に描くという相対化を行っている。人間と動物のあいだの失われた環というテーマは、フローベールが動物にある種の親近感を覚えていたことによる。

19世紀の近代ヨーロッパで、人種の差異に関する知は、植民地主義を背景に医学や骨相学などと相俟って発達していく。世紀半ばにはポール・ブロカがパリ人類学会を設立する。生物学的、人類学的な分類に、言語学的な分類も加わる。フローベール、ミシュレ、ルナンといった作家たちはそれぞれの立場から人種の問題に取り組んだ。フローベールは『東方旅行記』で人種の特徴に言及しているものの、それは価値判断を伴うものではない。あくまで精彩さや風変りさを書き留めるその視線はいわば民族学者のものである。

新たな人種概念は、18世紀の政治的文脈、たとえばブーランヴィリエの『フランス貴族に関する試論』で描かれる。そこでは貴族の優位性がフランク族のガリア征服によって正当化される。フランス革命時、シェイエスがこのモデルを『第三身分とは何か』で反転させて、第三身分による征服者の駆逐という文脈で用いる。19世紀の自由主義的な歴史家オーギュスタン・ティエリもまた、人種の闘争モデルを用いて社会の運動を説明する。フランク族に征服されたガロ＝ロ

一マ人による雪辱という図式であり、1789年と1848年はそうした人種的闘争の時と解釈される。一方、ミシュレはこのモデルを『ローマ史』に移し、ポエニ戦争をインド＝ヨーロッパ語族とセム語族との闘争と解釈する。ローマは権利と進歩を体現するのに対し、カルタゴは自由や合理的思考を育むことのない、不浄なる種族の都市と烙印を押される。こうした考えは、その後ルナンにも見られる。彼は、セム語研究を通じてセム族を公然と非難し、一神教に由来する不寛容のために科学や芸術において劣っていると論じる。フローベールは『サランボー』でそれを心に留めていて、タニット信仰とモロック信仰の一神教的な傾向、そして芸術を持たずに商業に邁進するカルタゴの姿を描いた。フローベールは、ミシュレのように二つの人種を対比させることはなく、むしろ彼の関心は人種の多様性へと向かう。作中、傭兵の軍隊は混沌として雑多であり、カルタゴ近郊の土着民や「不浄のものを食らう者」は人種的に分類不可能な異質性によって特徴づけられる。ティエリの場合と異なり、『サランボー』ではいかなる革命も起こらず、ミシュレの場合のような進歩を促進する人種の闘争も描かれない。

当時の歴史学によって、フローベールは人種の闘争モデルに通じていたが、自由主義や共和主義のイデオロギーに与することはなかった。また、生物学に依拠して科学をイデオロギーに利用した人種主義的な学説に与することもなかった。彼は、動物に近い野蛮で劣った階層と引き換えに存在するような優等民族という考えに同意できなかったのである。書簡では、タタール人やベドウィンやインディアンといった野生人に自らを投影しており、こうした想像上の系統は若い時期から晩年に至るまで繰り返し現れる。

本講演は、セジャンジュール氏の『フローベール、歴史の詩学』を人種の問題として発展させたものであり、今日的な視点も感じさせる興味深い内容であった。会場には多くの参加者が見られ、活発な質疑応答も行われて、来場者の関心の高さをうかがわせた。

＊

第二回講演会は、2019年4月6日中京大学名古屋キャンパスにて行われた。題目は「生物学と宗教：プーシェ、ミシュレ、フローベール」である。

生物学の知は、19世紀の非宗教的な共和主義の精神性といかに絡み合っているか。ミシュレとフローベールは思想的相違はあれ、いずれもフランスの自由思想と世俗化の流れの一部をなしている。二人に近い存在であった生物学者フェリックス・アルシメード・プーシェ（近年特にフローベールとの関連が注目されている）を媒介として、生物学の知と文学、さらに宗教がどのように交差するかを考えるものである。

19世紀初頭に生物変移説を唱えたラマルクは、生物の単一性と、複雑化による生物の多様性ということを考えて。聖書の天地創造がいまだ支配的で、動植物の

種は神の創造以来変わらないとされた時代、その理論は生物学への突破口を開く。その後シャルル・ロバンとクロード・ベルナルにより1848年に生物学会ができる。さらに世紀後半にはダーウィンの仏訳以降、生物に関する知は様々な形で普及する。ミシュレやフローベールもまた同時代の学者たちとの交際を通して、そうした知のネットワークと接していた。

プーシェはフローベールの父の教え子であり、ギュスターヴの先生であった。1860年代にフローベールとミシュレは、ルーアンや、プーシェが館長を務めるルーアン自然史博物館で出会っていた。ミシュレの日記から、彼が自然発生の問題に関心を寄せていたことがうかがえる。1859年に出版されたプーシェの『ヘテロジェニー』は、パスツールとの論争を巻き起こす。プーシェは特別な条件のもとであれば生命は無機物から自然発生的に生じると考えた。一方、パスツールは分子構造の違いから、無機的なものから有機的なものへの移行を認めなかった。論争は熾烈を極め、アカデミーはついに1864年パスツールの勝利を宣言する。パスツールは、プーシェがプロテスタントであったため、自然発生説を唯物論だとして宗教面でも攻撃した。『海』（1861）で自然発生を擁護したミシュレを批判したのも、科学的な誤謬を魅力的に語る文学は危険とみなしたからである。パスツールに軍配が上がったとはいえ、文学（フローベール）や芸術（ルドン）は自然発生を作品で描き続けた。

信仰のあったプーシェは、自然の中に現れる神の力が、自然発生によって物質の奥底にまで至ると考えるが、プーシェを称賛したミシュレやフローベールがそこに見出したのは、むしろキリスト教的信仰とは対立する考えであった。ミシュレの『海』は一つの博物学的で詩的な夢想であり、海は絶え間ない自然発生の状態にある生命のつぼとして描かれる。一方、フローベールは『サランボー』（1862）のタニット神殿の壁に自然発生の様子を描く。最終稿の『聖アントワヌの誘惑』（1874）でも自然発生は扱われており、そこではプーシェとミシュレの影響が混ざり合っている。

ミシュレは『海』で、自らの共和主義と進歩主義の活力を自然から汲み取ろうとする。自然の生命が証明するように、進歩は自然のうちに刻まれている。無限に小さな生物への関心は、静かに進歩を成し遂げる民衆への期待と表裏をなしている。草稿から明らかなように、ミシュレは海を女性化し、そこに性的な意味を付与する。海が粘液に満ちているというのは、様々な科学的テキストが横滑りしてできた幻想ではあるが、彼はそこでキリスト教の天地創造を自然発生に置き換えようとする。粘液をめぐる夢想は、人間と滴虫類との一体性、自然においてすべては同等であるという考えに基づいている。「アトム（微生物）」という章では、個体化されない原初の生命をめぐる幻想が繰り広げられる。『海』を読んだフローベールは、「アトム、血の花、万物の創造者によって、あなたは広大な夢想を描き出してくれた」と歴史家に賛辞を送っている。

『聖アントワヌの誘惑』の結末で海における自然発生が描かれるのは、おそ

らくミシュレの本と無関係ではない。そこにはプーシェの「無限に小さなもの」も響きあっている。アントワヌは生物の階梯を逆行し、ついに生命の起源に至るが、それは顕微鏡レベルの微小な形で現れる。草稿にはヘッケルのモネラなど様々な知の痕跡が見つかるが、決定稿では科学的な語は削除され、視覚的なイメージ（紋切型）が強調される。結末の場面では、線毛を備えた極小生物と、それを大きなサイズで再現したイエス・キリストの顔とがアイロニカルに重ねられる。生物学と宗教の二つのイメージを突き合わせることで、一つのポエジーが付与されるのであり、それはルドンの象徴主義に着想を与えることになる。

科学の知と文学が交差する点から、作品の詩学を鮮やかに浮かび上がらせる刺激的な内容の講演であった。新学期にもかかわらず、主に東海、関西圏からフローベール研究者やミシュレ研究者が多く参加し、終了後も有益な意見交換が行われた。

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています。

◇ 内容について 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。」

◇ 分量 cahier 2 頁分（2000 字程度）を上限とする。

◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。

- ・ 特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。
- ・ 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。

◇ 締め切り 毎年 3 月・9 月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

＊ 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。

＊ 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および 書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち **cahier** にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は **cahier** 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 26

編集 研究情報委員会

発行日：2020年9月7日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672